

# 大日本地震史料

卷之四

自明應元年  
至文祿四年

明應元年五月二十六日乙未、京都地震強シ、

〔蔭涼軒日錄〕

明應元年五月廿六日、夜將白頃、大地震、人皆驚動矣、

六月十六日乙未、陸奥國會津、地強ク震フ、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

明應元年六月十六日、大地震、又大雨降、○會津舊事雜考、  
會津土苴考同シ、

同二年三月九日甲戌、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應二年三月九日甲戌、晴、陰風吹、早旦雨灑、申刻又洒、午刻地震、

六月二十六日己丑、陸奥國會津、地強ク震フ、

〔塔寺八幡宮長帳〕

延德五年○明應二年癸丑林鐘廿六日、夜半天地震動シテ大雨降、

山野崩テ、耕作流失了、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

明應二年六月廿六日、夜大地震、別大雨洪水、○會津舊事雜考、  
會津土苴考同シ、

十月二十三日甲申、是夜、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應二年十月廿三日蜜日甲申、戌刻地振、

同月三十日辛卯、京都、奈良地震強シ、

〔後法興院記〕

十月卅日、辛卯、今曉寅刻地大震四五度、又辰刻小動、

〔親長卿記〕

明應二年十月卅日、晴、去夜寅刻有地震事、大動及  
兩三度、

〔大乘院寺社雜事記〕

十月晦日、後夜以後至今日數ケ度、其内大地振以外事也、同夜小地振、

〔大乘院日記目錄〕

明應二年十月卅日、早朝大地振、

十一月二日癸巳、京都、奈良地震フ、奈良稍、強シ、

〔後法興院記〕

十一月二日、癸巳、丑刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

十一月三日、夜前大地振、

同月三日甲午、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

震災豫防調查會報告第四十六號

甲

三日、甲午、丑刻又地震、

同月十四日乙巳、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

十四日、地振、

同月十五日丙午、京都、奈良地震フ、

〔後法興院記〕

十五日、丙午、戌刻地震小動、

〔大乘院寺社雜事記〕

十五日、地振、

〔延徳引付〕

一地震御祈禱事、一七夕日間殊可抽精誠之由、可令下知神宮之旨、被仰下候、仍言上如件、尙願誠恐頓首謹言、

十一月十八日

右少辨尙顯奉

進上 日野一位殿

十二月四日乙丑、京都地震フ、

〔後法興院記〕

十二月四日、乙丑、去曉地震、○去曉ハ今、曉ノ意ナリ、

同月二十四日乙酉、奈良地震屢、震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

十二月廿四日、地振及度々、

同三年一月七日丁酉、陸奥國會津、地震強シ、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

明應三年正月七日、大地震、

五月七日乙未、大和國地大ニ震ヒ、奈良東大寺、

興福寺、藥師寺、法花寺、西大寺ノ諸寺、及ビ矢田

庄ノ民舍等、多ク頽損シ、餘震連續シテ十二月ニ

及ベリ、是日、京都モ數、震ヒ、餘動日ヲ涉レリ、

〔後法興院記〕

明應三年五月七日、乙未、午刻地震兩三度、酉刻又地震、頗過例

式、

八日、丙申、今日又地震

九日、丁酉、入夜子刻地震云々、

十日、戊戌、午刻地震、

早旦令參内、月次和漢御會也、久我大納言申沙汰、酉刻終退出、地震事種々有御物語、今度興福寺、東大寺築垣頽云々、

十一日、己亥、巳刻地震、

十三日、辛丑、晴、晡雷雨甚、深更地震云々、

去七日、地震勘文、尋問記之、

只今午時大地震、有音、

天地瑞祥志云、傍通、水神所動也、京房云、地動、邑有亂臣、天子慎之、又云、地以夏動有音者、大將軍慎之、又云、五月

地動、不過廿五日有兵革、又云、水神所動者、無雨、江河枯竭、又云、地動水神所動者、有大喪、

明應三年五月七日

從二位有宣

〔和長卿記〕

明應三年七日、未、巳、午刻許有大地震、勸見之、弘決大論今日氏

宿也、如彼論則張氏室鼻婁胃、此六宿日地震者、君崩、是火神

動也、無雨、江河枯竭、年不宜、天子大臣受殃云々、及夜時々

猶震動、尤有恐懼歟、

陰陽勘文、可尋記、

八日、丙、晴、至今日時々猶地震、但少而止、

凡今日之地震者、尤吉也、心角房女虛井觜斗畢、此九宿帝釋

動也、天下安穩富饒、風雨順時、百穀成就、天子大臣受福、百

姓有嘉、大吉也云々、今日動者當房宿、但若是為昨日之餘氣

者、難稱吉歟、更為今日之分者、尤吉也、宿曜道勘文、可尋之、

後聞連日地震吉、七日餘氣云々、

〔親長卿記〕

明應三年五月七日、晴、地震九動、

廿九日、晴、或人云、去七日地震、南都以外云々、東大寺并所

所築地等崩了、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應三年五月七日、

一午刻大地震、以外事也、東大寺、興福寺、藥師寺、法花寺、西大寺、矢田庄在々所々、破損損亡、珍事、大略及轉倒了、

八日

一地振猶以動了、又所脫力所崩云々、所々石塔共、悉以破損了、

九日

一地振猶以連續了、

十日

一地振連續、珍事也、

十一日

一地振連續、

十二日、地振、

十三日、地振、

一善賢僧來、大佛御頭邊、地振ニ破損了云々、

十四日、地振、

十五日、地振、

十六日、地振、

十七日、地振、

十八日、雨下、地振、

十九日、地振、

一樋坊御經參申、此間所々祈禱罷向云々、

廿日、地振、

廿一日、大地振也、

一今日辻風、一乘院殿栗大木也吹折了、昨日良家衆大般若在之、爲地振祈禱云々、

廿二日、地振、

廿三日、地振、

廿四日、地振、

廿五日、雨下、地振、

一於四恩院群參大般若在之云々、三ヶ日歎、地振祈禱也、

廿六日、雨下、地振、

廿七日、雨下、地振、

廿八日、雨下、地振、

一寺門祈禱、至今日、

六月一日、大雨下、地振、

二日、夜雨下、地振、

四日、地振、

五日、地振、

一大佛御胸、地振ニ損了、今日加修理云々、善賢僧以下罷上云々、

六日、地振、

八日、地振、

九日、地振、

十三日、地振、

十九日、地振、

廿三日、地振、

廿四日、地振、

廿六日、地振、

七月八日、地振、

十月三日、地振、

四日、地振、

五日、地振、

六日、地振、

七日、地振、

十三日、地振、

廿二日、地振、一日連々、

廿五日、地振、

十一月十七日、冬至、地振、

十二月七日、地振、

八日、地振、

十二日、夜地振、

(大乘院日記目錄)

明應三年五月七日大地振、是以後百ヶ日餘連續了、

〔かな年代記〕

甲寅三年五月七日、大地しん、○會津八幡宮長帳續、編年小史、如是院年代記、並ニ之ニ同ジ、

同四年一月七日壬辰、京都、奈良地震フ、

〔御遊ごのゝ上日記〕

明應四年正月六日、あか月、ちしんぎうく、しうゆる、天下遊りなをすべし、○七日、曉ナリ、

〔後法興院記〕

明應四年正月七日、日壬辰晴、今曉卯刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應四年正月七日、地振、

同月十三日戊戌、是夜、京都、奈良地震フ、奈良ハ稍、強シ、

〔後法興院記〕

十三日、戊（頭書）戌、戌刻地振、

〔實隆公記〕

明應四年正月十三日戊戌、天陰、入夜亥初刻地震、其動莫大也、

〔御遊ごのゝ上日記〕

十三日、地しん、ひさしくゆる、

〔大乘院寺社雜事記〕

十三日、雪、夜大地振、

二月三日丁巳、是夜、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

二月三日、雨下、夜地振、

五月二十九日辛亥、京都地震フ、

〔後法興院記〕

五月廿九日、辛亥巳刻地震、

八月十五日乙丑、京都地震フ、

〔御遊ごのゝ上日記〕

八月十五日、地しんゆる、

同五年閏二月十日戊子、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應五年閏二月十日、戊子巳刻地震、

同六年五月十三日庚寅、攝津國地震フ、

〔高代寺日記〕後鑑所載

明應六年五月十三日、地震、

十月十八日丙戌、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應六年十月十八日、丙戌今曉寅刻大地震、

今月十八日寅時大地震、傍通、金翅鳥所動也、

天地瑞祥志云、傍通、金翅鳥所動也、天子慎之、又云、地動者國有亂臣、人主不安、又云、地動者疾疫有喪、又云、地動者必

四海戰有流血、又云、十月地動者、不過五十五日兵革起、

明應六年十月十八日 從二位有宣

同七年一月一日戊戌、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應七年正月二日條、元日地震在之、

同月五日壬寅、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

五日、自夜前雨下、早旦地震、

同月八日乙巳、奈良地兩度震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

八日、兩度地振、夜大雨下、

二月二十五日辛卯、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

明應七年二月廿五日、日るほどにちしんゆる、

六月十一日丙子、京都地震強シ、餘震日ヲ重又、

〔御湯殿上日記〕

六月十一日、ひるほどにおびたゞしくちしんゆる、すげなう

ゆりさいうする、

十二日、けふもちとちしんゆる、

十三日、けふもなへゆる、

十四日、ちしんそとゆる、

廿四日、ちしんゆる、

廿六日、ちしんゆる、

〔後法興院記〕

明應七年六月十一日、丙子申刻大地震、

十二日、丁丑昨日地震勘文、尋問記之、

只今申時大地震、月在豆宿、水神所動也、

天地瑞祥志云、月行豆宿者、水神所動也、京房云、地動、邑

有亂臣、天子慎之、又云、地動者 大將軍慎之、又云、夏

地動、少老多死、又云、六月地動、七十五日内有兵革、又云、

水神所動、無雨、江河枯竭、

明應七年六月十一日 從二位安倍朝臣有宣

十三日、戊寅一昨日地震勘文、尋問在通記之、

今月十一日申時大地震、傍通心宿、天王所動也、

河圖秘ヒテツヘンニ微篇曰、地之動大臣之逆、內經曰、心宿地動、人君有

災、走獸健者衰、又云、地以六月動、百姓不安、人民勞苦、又

云、夏地動喪、

填星直日地動、世界不安、重威人疾病、

宗均曰、地震之異、陰陪主也、

保乾圖曰、地動下度上無陽自燭則退臣誅過讒近盛、

明應七年六月十三日

在通

廿四日、己巳刻地震、

〔親長卿記〕

明應七年六月十一日、晴、地震、大動

〔實隆公記〕

明應七年六月十一日、今日地震以外也、

〔言國卿記〕

明應七年六月十一日、八ツ下刻大地震、

十二日、天晴、小地震、

〔かな年代記〕

六月十一日、諸國大地しん、○塔寺八幡宮長帳續、長享年後畿内兵亂記、  
編年小史、東榮鑑、異本年代記、拔萃、並二同シ

八月二十五日己丑、伊勢、遠江、三河、駿河、甲斐、相

摸、伊豆諸國、地大ニ震ヒ、瀕海ノ國ハ海嘯ノ災

ヲ被レリ、是日、京都、奈良及ビ陸奥國會津モ強

ク震ヒ、餘動月ヲ重ネタリ、

〔御湯殿上日記〕

八月廿五日、けさぢしんぎうくしうゆる、

廿六日、けふもぢしんちとゆる、

(諸社) しまじやへの御いのりの事、奉行におほせいださるゝ、

九月二日、こよひつよくゆる、

三日、ぢしんけふもちとゆる、

十月一日、ぢしんさいなくゆる、

五日、ぢしんゆる、

廿日、ぢしんにつきて、ことごともするよし、松ゆい御にはに

て申、やがて御さたあり、めでたし、

廿四日、ぢしんにつきて、(例)いつものやしろにはつ句御さたあ

る、ぎをむまうにあるよしきこしめして、御連歌御さた、宮

の御かた、ふしみ殿、そのほかあやのこふぢ、かんろじの中

納言、はく、御人す、しひつためさねじこう、はいかたの御い

はるに、いつものごこく御ともねうばうたちまでまいる、め

でたし、

閏十月十八日、よなかほごにぢしんごくしうゆる、

十一月三日、ありのお、てんちさいへん御きたふ百とつけら

れて、御なで物くれう三百足つけらるゝ、

〔實隆公記〕

八月廿五日己丑、早期地震大動、五十年以來無如此事云々、

予出生以來、未知如此之事、

廿六日庚寅、抑地震御祈事、所々被仰之云々、奉行職事送一

通、

地震御祈事、自來廿九日一七ケ日、殊可抽精誠之由、可令

震災豫防調查會報告第四十六號

甲

下知神宮給之旨、天氣所候也、仍言上如件、尙顯誠恐謹言、

八月廿五日

右少辨尙顯奉

進上 侍從大納言殿

則相觸頭辨宣秀朝臣、其狀如此、

地震御祈事、自來廿九日、一七ケ日、殊可抽精誠之由、可令

下知

神宮給之旨、被仰下候也、謹言、

八月廿五日

實隆

頭辨殿

○本條祈祭ハ、御湯殿上日記廿八日ヨリト爲シ、實隆公記ハ廿九日ヨリト爲ス、蓋、初メ廿八日ニ定メタルヲ、廿九日ニ更メラレシナルベシ、

九月十一日甲辰、及晚滋野井一蓋張行有興、其間地震又甚、

凡自去月廿五日至今日、每日不闕地動、前代未聞事也、

十月十五日丁丑、晴、亥刻地震以外也、

廿七日己丑、陰、及晚雷鳴、地震、

廿八日庚寅、晴、曉天雷鳴雨降、地震、

閏十月十七日己酉、晴、抑丑下刻、○丑下刻ハ十八日ノ曉天ナリ、地震甚、其動數

刻、消魂了、

廿八日庚申、晴、嚴寒甚、抑御祈事、近日被仰所々云々、御教

書廿七日到來、廿八日書一通、神宮奉行職司也遣頭辨了、

天下安全、朝儀再興御祈事、從來月四日一七ケ日、殊可抽

精誠之由、可令下知神宮給之旨、天氣所候也、仍言上如件、尙顯誠恐謹言、

後十月廿七日

右少辨尙顯奉

進上 侍從大納言殿

追言上

天變地動及度々、殊可抽精誠之由、同可令下知給候也、重誠恐謹言、

近日天變地動、及度々、其愼不輕、自來月四日一七ケ日、

別而抽精誠、可奉祈天下安全、朝儀再興之由、可令下知

神宮之旨、被仰下候也、謹言、

後十月廿七日

實隆

頭辨殿

十一月七日、今夜又有地震、

(後法興院記)

八月廿五日、丑辰時大地震、去六月十一日地震一倍事也、尋

問勘文記之、

今月廿五日辰時大地震、傍通、水神所動也、

天地瑞祥志云、傍通、水神所動也、內經曰、秋地動、天子凶、

大臣受殃、又云、地動、其國有戰、民流亡、

又云、地動、天下疾病有大喪、又云、八月地動、六十日內兵

革起、



明應七年八月廿五日

從二位有宣

廿六日庚寅、去夜曉鐘時分小地震、今日又午刻酉刻兩度小地震、昨日地震以後、雷鳴事非其義、鳴動時分、光物飛云々、其長、カラカサノセイト云々、流星歟云々、同時天地震動、可恐々々、從聖門有音信、昨日虛空鳴動云々、

今日廿五日、辰時大地震數、而無聲、傍通張宿、火神所動也

洛書ラフ雄罪フイ級キウ曰、地震スレバ衆虐ギヤク盛ナリ、

尙書カ夏侯セツ說曰、地動大臣盛、將有テ爲スル而不靜、兵數動、

春秋緯運斗樞云、地動亂並ナラヒニ、群臣厥施、佞者執政、

君子在野、小人在位、朝廷多賊、國受其咎也、

公羊傳云、臣專政、陰而行陽、故地震、

穀梁傳云、地動大臣盛、軍將動有變、

夏氏云、地動民不安、搖擾流移、

又云、地動數殺シク人、賊臣暴、

鴻範傳云、地動者臣不臣、下者大貴也、

明應七年八月廿六日

正三位在進

○忠富王記同シ

廿七日辛卯、今日又兩度小地震、

廿八日壬辰、晚頭小地震、

九月一日甲午、及黃昏小地震、

三日丙申、去曉地震、

五日戊戌、今曉地震、

七日庚子、巳刻地震、

十一日甲辰、酉刻地震、

十三日丙午、晚景小地震、

十六日己酉、去曉小地震云々、

廿五日戊午、未刻地震、傳聞去月大地震之日、伊勢、參河、駿

河、伊豆大浪打寄、海邊二三十町之民屋悉溺水、數千人歿命、

其外牛馬類不知其數云々、前代未聞事也、

廿七日庚申、今曉卯刻并巳刻地震、昨日申刻地震云々、連日

儀、頗希代事歟、

十月二日甲子、午刻地震、

三日乙丑、午刻地震、

十五日丁丑、戌刻地震、

十八日庚辰、去夜亥刻地震云々、

閏十月十八日庚戌、去夜半更大地震、後有鳴動、

廿五日丁巳、世上儀種々有雜談、

十一月四日乙丑、今朝卯刻地震、

廿九日庚寅、今朝卯刻兩度地震、廿七日也一昨日亥刻地震云々、連日

之儀、頗希代事也、

震災豫防調查報告第四十六號

甲

〔親長卿記〕

八月廿五日、晴、巳刻許大地震、以外事也、○下略

〔言國卿記〕

八月廿五日、天晴、五ツ時時分大地震、

廿六日、天晴、夜地震、

廿八日、七ツ時分地震、夜半同有之、

廿九日、天晴、夜地震、

九月朔日、天晴、時々雨下、夜入地震、

二日、雨下、夜九ツ時分地震、

四日、天晴、夜半至時地震、

六日、天晴、雨下、地震、

七日、天晴、夜地震、

八日、天晴、地震每々、

十八日、雨下、地震、

十九日、天晴、晝夜之間、地震三度、

廿五日、天晴、地震、

廿六日、天晴、地震晝一度、夜二度、

十月朔日、天晴、地震每々、

二日、天晴、地震每々、

十五日、天晴、地震、

十七日、天晴、夜半大地震兩度、

〔和長卿記〕

明應七年八月廿五日、丑晴、辰刻有大地震、予生前無如此儀、

諸人恐怖、占文又以外也、水神動云々

九月二日乙未、晴、至今夜迄、七日歟地震連續畢、

〔忠富王記〕

明應七年九月四日、晴陰不定、地震同前、

五日、地震又有動、千度板同前、猶以祈念無由斷者也、

六日、地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

十月十九日、數日地震連續了、

廿八日、地震、雨下雷光、

一八月廿五日、大地震火神動、以來、日々夜々令連續者也、

〔內宮子良館記〕

今度大地震ノ高鹽ニ、大湊ニハ家千間餘、人五千人許流死ト

云々、其外伊勢島間ニ彼是一萬人許モ流死也、明應七年戊午八月廿二日ノ事也、○

長享年後畿内兵亂記同ジ、但、八月廿五日ニ作レリ、子良館記ノ二十二日ニ作ルハ、蓋、轉寫ノ誤ナラン、下條去八月廿五日大地震ノ文、證スベシ、

明應七年戊午九月御祭、國崎御贄三トリ之事、去八月廿五日

大地震ニ、大鹽ニ彼島家人大略流失、雖然於彼役人者、潔齊

ノ由申、御贄持參申之處、島中大略可爲不淨之間、奉備御饌

ニハクミ申サズ、然間彼熨斗可爲何之由處、去文明十一年己亥五月二日、依糠春屋喧嘩館自燒之時、有觸穢ノ事間、五月五日之御饌延引之時、彼御饌米ノ事、後日役人方へ請取申、

於子良館内三方外三方其外役人御饌如分當米ニテ分當ル、任其例、今度モ御饌熨斗、後日ニ内外物忌其外方々ノ役人、悉請取之、一臈德分ハ塵ノ熨斗十二括リ、俵共ニ請取、又サ、

イハ數百也、其後御禰宜方へモ如御饌之時、御長官二三ハ括リツ、一方ヨリ進、四五六七殿ハ二三方ヨリ十五ツ、進、

(妙法寺記)

明應七年正月一日ヨリ殊ノ外ニ暖ニテ雪不降、道吉、八月廿五日辰刻ニ大地震動而、日本國中堂塔乃至諸家悉頽シ落、大海邊ハ皆々打浪ニ引レテ、伊豆浦へ悉死失ス、小川悉損失ス、

(異本年代記拔萃)

明應七年八月廿五日、辰刻大地震、其程良久、從其相續日々地搖、此時伊勢國大湊悉滅却、其外三川、紀伊諸國之浦津、高鹽充滿而滅亡云々、

(塔寺八幡宮長帳)

明應七年八月廿五日、巳刻ニ大地震アリ、

(塔寺八幡宮長帳續)

鎌倉由井濱海水涌、大佛殿

迄上ル、十三年以來、旱渴陸路ト成ル江島、又如昔、○會津八幡宮長帳、新選和漢合圖、會津舊事雜考同シ、但シ舊事雜考文明丙午江島爲陸地者、今日又爲海如故ニ作レ

(鎌倉大日記)

明應四年卯、八月十五日、大地震洪水、鎌倉由比濱海水到千度檀、水勢大佛殿破堂舍屋、溺死人二百餘、

○大日記、コノ震災ヲ四年ニ掲ゲ、且八月十五日ト爲ス、並ニ誤レリ、

(東榮鑑)

明應七年八月廿五日、諸國大地震、遠州前坂ト板本ノ間ノ川ニ津波入り、一里餘ノ渡シトナル、是ヲ今切ト號ス、

(續史愚抄)

明應七年六月十一日丙子、地震大動、諸國大震、遠江山崩地裂成湖、名新居云、或作翌年、言國卿記、親長卿記、年六月誤矣、代略記、江戸道中記、

(願書) 新居及今切等名、一說永正七年度名云、未詳、

(遠江國風土記傳)

濱名郡中之郷、村五、關ノ西北十町、屬入海、新井、本字荒井、古歌詠安禮乃崎、

荒井、舊非郷村宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時波洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船泊爲良武安禮乃崎榜多味行之棚無小舟、後爲村號、舊荒井中荒井等地、水沒亡人家、古老曰、今荒井者古中之郷也、古荒井在

震災豫防調查報告第四十六號

甲

關東海中十二三町、應永十二年、文明七年、明應八年、及永正七年等有急波、破荒井崎、湖水變爲潮海矣、日箇崎千古、北山千古、舊荒井、中荒井、同時爲海、於今切所號本荒井、於松原中云中荒井也、礎石於今存焉、而後寶永四年十月四日、地震大波、關東十二町水沒、地形大變矣、昔時橋本新井各千戶鄉也ト云ヘリ、

驛家同所、水、驛、

關同所、新井成、住吉社、在白洲濱、

自關西至橋本堺新道八町、又西至舊白須賀堺八町、

荒之崎、萬葉集高市連黑人詠安禮乃崎、詠新井宿、西起源太山、東

對舞澤驛家、長一里、廣或十町、或二三町、有松、古驛路也、崎中

央有庄堺之碑石、色赤紫、碑石合村越崎、南北相對、是昔二郡之堺乎、呼是碑石、謂庄堺之石、碑文知有若無、

寶永四年關司政愈書曰、應永十二年大波破此崎、或曰、文明七年八月八日、

明應八年六月十日甚雨大風、潮海與湖水之間驛路沒、日箇崎千戶水沒、在關東南十町許白洲濱住吉八王子之森間、尾崎孫兵衛者之祖繫柑樹杪

存命矣、其孫今在橋本、永正七年八月廿七日、波濤中斷於驛路、又破橋矣、從是以來、湖水變爲湖海、橋本驛家沒、置新

井宿也、寶永四年十月四日地震、舉波三度、各高一丈計、許、

崩關、潰家三百四十八戶、溺死二十一人、亡船四十八艘、渡

海絶、五日吉田城主牧野祭酒之臣富永政愈爲關成、當難所誌置也、寶永四年十二月筆記、

今切海關、與前驛中間海路一里、政愈曰、渡海二十七町計、

〔東海道名所圖會〕

濱名湖

濱名ハ郡名也、國號遠江も此湖水に基也、一名猪鼻湖、又は

遠湖ともいふ、略中又近きとし、蝶夢幻阿彌の遠津湖の記に、

略中おほよそ湖の廣さ北に入事五里にあまり、東西四里にす

ぐ、南はひたふるの大海也、山々三方にならび立りと云々、

振裾記に、むかひは此國名の水うみ有しが、後土御門院明應

八年六月十日、洪水の變ありて、水うみとしは海とのあいだ

きれて、潮入て水うみはなくなるゆるに、今切といふ也、濱

名の橋は、水うみよりおへる川にかくりしゆる、今はなし、

今切

御土御門院御宇明應八年六月十日、大地震して湖と潮との

あいだきれて、海とひとつに成て、入海となるこれを今切といふ、

〔編年小史〕

明應八年六月十日

遠州橋本甚雨大風、海涌湖溢、濱居皆漂蕩、湖海之間、驛路亦

所沒、因成舟航、是日今切渡、驛宿日新居、

○實按ズルニ、風土記傳、名所圖會、編年小史ノ今切洪波ヲ明年六月十日ニ揭ゲタルハ、並ニ誤レリ、看聞御記、子良館記等ニ參スルニ、是日、三河、伊勢、伊豆ノ海嘯ヲ記セリ、其同日タルヤ知ルベシ、且果シテ明年六月十日トセバ、當時飛鳥井雅康、富士山ヲ遊覽シ、歸途ニアリ、會、遠江ヲ經、同日ハ小夜中山ニ在リ、十三日引馬野濱松ノ北ヲ過ギ、十五日汐見坂遠江三河ノヲ越ユ、而シテ其記事、絶テ風雨地震ノコトニ及バズ、又沿道國境ニアリヲ記サズ、亦以テ三書ノ誤謬ニ出デタルヲ知ルニ足レリ、東榮罹災ノ狀ヲモ記サズ、鑑ハ後人僞托ノ書ナレドモ、本年八月二十五日ニ揭ゲシハ、實ヲ得タリト謂フベシ、

同八年一月四日甲子、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應八年正月五日、乙丑昨日酉刻地震、

同月十五日乙丑、京都、奈良地震フ、

〔後法興院記〕

五日乙丑、晴、晚頭地震、入夜小雨、

〔實隆公記〕

明應八年正月五日乙丑、申刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應八年正月五日、地震、毎日様也、去年より連續了、

二月二十六日丙辰、京都地震フ、

〔後法興院記〕

二月廿六日、丙辰申刻地震、

同月二十八日戊午、京都、奈良地震フ、奈良ハ稍

強シ、

〔後法興院記〕

廿八日、戊午今朝卯刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

二月廿八日、朝大地震、

四月八日丁酉、京都地三回震フ、

〔實隆公記〕

四月八日丁酉、陰、有地震、三度、有動聲、自乾方起

同月十五日甲辰、京都地震フ、晚ニ及ビ又震フ、

〔後法興院記〕

四月十五日、甲辰今朝辰刻地震、晚景又小地震、

六月四日癸巳、奈良地震フ、

〔大乘院寺社雜事記〕

六月四日、土用、天一天上、地振了、

七月十日戊辰、京都、奈良地震フ、京都ハ稍強シ、

〔大乘院寺社雜事記〕

震災豫防調査會報告第四十六號

甲

七月十日、地振、

〔後法興院記〕

七月十日、戊辰酉刻大地震、

同月十六日甲戌、京都、奈良又震フ、

〔後法興院記〕

十六日、甲戌酉刻地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

十六日、地振、

八月六日甲午、京都地震フ、

〔後法興院記〕

八月六日、甲午秉燭地震、

九月二十二日己卯、京都地震フ、

〔後法興院記〕

九月廿二日、己卯酉刻地震、

十二月二日丁亥、京都、奈良地震フ、京都稍強シ、

〔後法興院記〕

十二月二日、丁亥申刻大地震、

〔大乘院寺社雜事記〕

十二月二日、地震、

同月五日庚寅、京都地震フ、

〔後法興院記〕

五日、庚寅今曉寅刻地震、

同九年一月十二日丁卯、京都地震フ、

〔後法興院記〕

明應九年正月十二日、丁卯申刻地震、

二月二十七日辛亥、京都、奈良地震フ、

〔後法興院記〕

二月廿七日、辛亥去曉大地震、○去曉ハ今曉ノ意ナリ、

〔大乘院寺社雜事記〕

明應九年二月廿七日、(去脫カ)雨下、夜地震、

四月二十三日丁未、京都地震フ、

〔後法興院記〕

四月廿三日、丁未申刻地震、

六月四日丁亥、甲斐國地強ク震ヒ、餘震止マズ、

〔妙法寺記〕

明應九年六月四日、大地震動、上ノ午年○明應七年八月二十五日大地震ニ

モ勝レタリ、惣而如何ナル日モ夜モ動事不絶、更ニ無限、

同月二十五日戊申、京都地震フ、

〔後法興院記〕

六月廿五日、戌申酉刻地震、

九月一日癸丑、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

九月小一日、癸丑戌刻地震、

文龜元年十一月六日辛巳、是夜、京都地震フ、

〔後法興院記〕

文龜元年十一月六日、辛巳戌刻地震、

十二月十日甲寅、越後國國府、地大ニ震ヒ、人家

多ク潰損セリ、

〔宗祇終焉記〕

〔國府〕

なか月朔日頃に、越後のこふに至りぬ、宗祇氣さんに入て、  
年月へだよりぬる事など打かたらひ、都へのあらまし候侍  
る、おりしも比なの長路のつもりにや、身にわづらふ事あり  
て、日數になりぬ、○中略かかくてしはすの十日巳刻ばかりに、地  
震おほきにして、まことに地をふりかへすにやとおぼゆる  
事、日にいくたびといふかずをしらす、五日、六日うちつど  
きぬ、人民おほくうせ、家々ころびたふれにしかば、旅宿だ  
にさたかならぬに、又おもはぬやごりをもとめつゝ、年も暮

ぬ、

同三年四月十日丙午、京都地震フ、

〔實隆公記〕

文龜三年四月十日丙午、夕立雷鳴、有地震、

八月十九日癸丑、是ヨリ先、京都地震フ、是日、諸

社寺ニ祈禱ヲ命ジ給フ、

〔實隆公記〕

八月十九日、抑去六日薄蝕、其後二星合又地震等事、諸寺諸

社御祈事被相觸云々、

○コノ地震ノ日ハ、未ダ考フル所ナシ、

同月二十七日辛酉、京都地震フ、

〔實隆公記〕

廿七日、今日辰下刻有地震、

永正元年八月六日甲子、京都地震稍、強シ、

〔後法興院記〕

永正元年八月六日、甲子、日没時分地大震、

〔二水記〕

永正元年七月六日、甲子、未刻地震動、

永正元年、二年、三年

〔實隆公記〕

永正元年八月十五日癸酉、晴、  
抑右少辨送一通御祈事也、

就天變地妖、別而抽精誠可令祈謝旨、可令下知神宮給由天氣所候也、仍言上  
如件、伊長誠恐謹言、

八月十五日

右少辨伊長奉

進上 侍從大納言殿、○實隆

同二年八月二十五日丁丑、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正二年八月廿五日丁丑、陰雨、及晚地震有聲、

同三年三月三日癸未、肥後國阿蘇山、鳴動シテ火

石ヲ雨ラセリ、

〔八代日記〕

○肥後八代城主相良家ノ日記ナリ、文明十六年ニ起リ、永祿九年ニ終ル、

永正三年丙子三月三日、阿蘇御嶽御鳴動、火石アガル、

十月十七日癸亥、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正三年十月十七日癸亥、天晴、今夜地震、

十一月二十一日丙申、京都地震稍、強シ、

〔實隆公記〕

十一月廿一日丙申、雨降、辰刻地震以外甚、頗消魂、

廿二日丁酉、抑地震事在通卿送之、續左、

今月廿一日辰時大地震、現度箕宿、龍神之所動也、

天文錄云、地動、兵數動、京房云、地動、朝廷有亂臣、天

地災記云、十一月十二月地震、大凶、百日中兵起、又云、

地動、四海有兵喪、國家慎之、又云、江河枯渴、民人憂、內

經云、地動、邑都內有哭聲、周本記云、震者振也、陰不靜也、

臣欲侵君則地震、伯陽甫曰、地者主坤、坤宜安順、而還震

動者、上易政之象也、潛潭曰、地動搖、臣下謀上、洛書

曰、土震不言、衆疢盛也、(吉カ)

永正三年十一月廿二日

刑部卿賀茂朝在誠

從二位賀茂朝在通

〔宣胤卿記〕

永正三年十一月廿二日、晴、

今月廿一日巳時大地震在音、傍通宿者、天王所動也、

天地瑞祥志云、傍通、天王所動也、天子吉、大臣受福、又

云、天王所動、十一月地動者、百日之內兵革起、又云、冬地

動者天下疾疫、又云、冬地動者其國有陰謀、

永正三年十一月廿二日

從二位安陪朝臣有宣

同月二十三日戊戌、京都地震フ、

〔實隆公記〕



十一月廿三日戊戌、晴、未明有地震、小動也、

閏十一月二十九日甲戌、京都地震フ、

〔實隆公記〕

閏十一月廿九日甲戌、晴、雪積、地震、占文後日三日送之、

今月廿九日寅時大地震、傍通女宿、天  
王所動也、

占文曰、冬地動、人主有兵喪、又云、地動、國有亂臣、

天地瑞祥志云、地動大臣盛、軍將有變、

宋均云、佞者執政、君子在野、小人在位、朝廷多賊、受其咎、

永正三年閏十一月廿九日 刑部卿賀茂鞠在誠

從二位賀茂鞠在通

同四年二月八日壬午、肥後國地強ク震ヒ、餘動月

ヲ越ユ、是夜、京都モ亦震ヘリ、

〔尙通公記〕

永正四年二月八日、壬午、晴、夜亥刻地震、

十四日、戊子、晴、時々小雨洒、有宣卿去地震勘文等進上之、

今月八日戌時大地震、月行井宿者、  
天王所動也、

天地瑞祥志云、月行井宿、天王所動也、又云、天王所動者、

天子吉、大臣受福、天鏡經云、春地動者、必其國有陰謀、又

云、春地動者、天下疾疫事、

永正四年二月九日

從二位有宣

〔實隆公記〕

永正四年二月八日壬午、戌刻地震、大動也、天王動云々、後日

在通送占文、

〔宣胤卿記〕

永正四年二月八日、晴、夜地搖、

十二日、晴、

地妖占文、御愼不輕、早抽丹誠可祈謝旨、可令下知神宮給

者、依天氣言上如件、伊長誠恐頓首謹言、

二月十二日

右少辨伊長奉

進上中御門大納言殿

伊長御祈奉行也、妖ハ搖可然歟常事也、又者ノ字腋寄テ書

事不可然、先年令不審之處、父黃門元長卿云、故入道親長草案

如然云々、元長卿五位職事貫首時不然、父親長卿立副諷諫、

今更何如此哉、馳筆書置草案、不足信用者歟、只任道理歟、

地搖占文、御愼不輕、早抽丹誠可致祈謝旨、可令下知神宮

給之由、被仰下候也、謹言、

二月十二日

頭辨殿

尙顯朝臣、神宮奉行也、

〔北肥戰志〕

永正四年、五年、六年、七年

一六二

永正四年二月八日ヨリ、三月十日迄、大地震不止、

四月七日庚辰、京都地震フ、

〔尙通公記〕

四月七日、庚辰、雨下、地震、

同五年八月七日癸酉、京都地震フ、

〔尙通公記〕

永正五年八月七日、癸酉、晴、去曉卯刻有地震、

〔實隆公記〕

永正五年八月七日癸酉、晴、未明地震、

地震占文、在重朝臣送之、續左、

今月七日寅時地震、傍通箕宿、龍神所動也、

天地瑞祥志云、地動、大臣盛、軍將有變、天災記云、地動、四

海有兵喪、國家慎之、古文曰、地動、國有亂臣、內經曰、八月

地動、六十日內兵起、又云、地動、邑都內有哭聲、周本紀云、

震者振也、陰不靜也、臣欲侵君則地震、又云、地動兵數起、

永正五年八月七日

圖書頭賀茂鞠在重

從二位賀茂鞠□□

同六年三月七日己亥、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正六年三月七日己亥、晴、入夜雷鳴、地震、在重朝臣來、以

外天變並地震占文等持來、御祈抽丹誠之由、相語之、

十六日戊申、雨降、地震占文、在重朝臣持參之、近日天變地妖

連續、所驚入也、彼占文等續之、在與、○本書、占文缺ク、

四月九日庚午、京都地震フ、

〔實隆公記〕

四月九日庚午、今日有地震、占文可尋、

同七年八月八日壬辰、攝津、河内二國、地大ニ震

ヒ、四天王寺ノ石華表崩レ、藤井寺潰レタリ、山

城、大和兩國モ亦強ク震ヒ又、

〔尙通公記〕

永正七年八月八日、甲辰、晴、曉大地震兩二度、驚入事也、

今月八日寅時大地震、傍通、天王所動也、

天地瑞祥志云、傍通、天王所動也、京房云、天王所動者天子

吉、大臣受福、天鏡經云、地動有音、必其國有陰謀、又云、地

動有音、六十日內兵革起戰競、又云、地動有音、天下疾疫

大喪事、

永正七年八月八日

從二位安倍朝臣有宣

八月九日、乙晴、今朝猶地動、

〔實隆公記〕

永正七年八月八日壬辰、晴、今曉大地震有聲、頗大動數ケ度、以外事也、占文可尋之、

〔拾芥記〕

永正七年八月七日、夜寅刻○寅刻ハ當今ノ略、午前二時ニ當ル、即翌曉ナリ、他書七日ニ係ルモノハ、蓋、本書ノ誤ヲ襲ヒシナラン、大地震、天王寺○攝津東生郡廿一社○不詳悉顛倒云々、可謂佛法破滅之時者乎、

〔古文書類纂〕

○飛彈國吉城郡細江村壽樂寺所有寫本大般若奧書、

于時永正七年庚午八月、大和、山城大風大地震仕、天王寺石鳥居ユリ崩レ、同藤井寺○河内丹南郡ノ本堂忽ニクヅレヌ、前代未聞ノ世間ノサタナリ、即時ニ旦那鳥居、同藤井寺モ造立候、

〔多聞院日記略〕

天正十四年正月八日條、永正七年庚子八月八日刁刻大地震、所々破損、天王寺○攝津東生郡石ノ鳥居崩、藤井寺○河内丹南郡モクヅル、同數日ユリテ、九月廿九日五夜ノ半ヨリ、東風大雨、奈良中方方大破ニ合ト、舊記ニ在之、心細キ者也、

〔長享年後畿内兵亂記〕

永正七年八月八日、大地震、天王寺石鳥居、河内堂塔崩裂、人民多死、

〔年代記抄節〕

永正七年八月七日、夜大地震、天王寺石鳥居崩ル、浦々高鹽充滿、波花人家損失云々、○異本年代記拔萃同シ、

〔高代寺日記〕

永正七年八月七日、大震、○かな年代記、塔寺八幡宮長帳續、會津舊事雜考、並ニ同シ、

〔新選和漢合圖〕

永正七年庚午八月七日、大地震、堂舍破、

〔續史愚抄〕

永正七年八月十日甲午、被仰地震及二星合御祈於神宮、他社寺同、可爲七ケ日者、時元記、及諸

歟、

〔足利季世記〕

永正七年ノ八月七日ノ夜、大地震、ヲビタミシクシテ、國々堂舍佛閣顛倒シ、天王寺ノ石鳥居モタラレケリ、其地震七十餘日不止、

〔重編應仁記〕

今茲永正七年ノ秋八月七日ノ夜、大地震夥シ、其レヨリ以後七十餘日震動猶止マザリケレバ、國々ノ堂社佛院、大廈民屋顛倒スル事、其數ヲ不知多カリケルニ、此時天王寺ノ石ノ鳥居モ倒レニケリ、

〔盛衰通紀〕

永正七年八月七日、天下一統大地震シケリ、  
〔中古日本治亂記〕

永正七年、天下一統ニ大地震シテ、堂塔佛閣民屋ニ至ルマ  
デ、悉ク顛倒シテ無恙ハ希ナリケリ、故ニ棟折梁落テ壓死ス  
ル人、數ヲ不知、近年ハ打續、諸國一同ニ動亂シ、兵火ノ爲メ  
ニ家屋ヲ被燒、適々殘ル屋室ハ地震大風ニ被レ破、人多ク戰  
死シ、或ハ餓死疫癘ニ死スルノミナラズ、今又地震ニ被打  
殺、洪水ニ漂溺シテ命ヲ殞ス人幾千萬ゾヤ、然ルニ能人ノ種  
〔絶カ〕  
モ繼キズ、又殘ル人家モアル事ヨト、今更驚ク計ナリ、

〔參考〕

〔攝津志〕○東  
生郡

四天王寺 天王寺村、山號荒陵、一名三津寺、又名難波大寺、又稱法華園、又名敬  
田院○中其西建門標、扁曰釋迦如來轉法輪所當極樂土、東門中心鉅木

宏材、歲久朽頽、永仁二年釋忍性、奉  
敕主務當寺、以石新之、高二丈五尺、

同月二十四日戊申、京都地數震フ、

〔尙通公記〕

廿四日庚申、晴、及晚地、夜又地震、  
〔震脱カ〕

〔實隆公記〕

廿四日戊申、晴、地震二度、入夜又動、以外也、

同月二十七日辛亥、是日ヨリ明日ニ涉リ海嘯、遠

江國荒井崎ヲ破リ、潮流濱名湖ニ通ズ、世ニ之ヲ  
今切トイフ、

〔遠江國風土記傳〕

濱名郡中之郷村五、關ノ西  
北十町屬入海、

新井、本字荒井、古歌  
詠安禮乃崎、

荒井舊非郷村、宿驛之名、而海岸石碕之名也、此所南海非時  
波、洲渚大荒、故曰荒也、萬葉集高市連黑人歌曰、何所爾可船  
舶爲良武安禮乃崎榜多味行之棚無小舟、後爲村號、舊荒井、  
中荒井等地、水沒亡人家、古老曰、今荒井者古中之郷也、古荒  
井在關東海中十二三町、應永十二年、文明七年、明應七年、及  
永正七年等有急波、破荒井崎、湖水變爲潮海矣、日箇崎、千古  
北山、千古舊荒井、中荒井同時爲海、於今切所號本荒井、於松  
原中云中荒井也、礎石於今存焉、而後寶永四年十月四日地震  
大波、關東十二町水沒、地形大變矣、昔時橋本、新井各千戶郷  
也ト云ヘリ、

驛家同所、水  
驛、

關同所、新井成、  
住吉社、在白  
洲濱、

自關西至橋本堺新道八町、又西至舊白須賀堺八町、荒之崎、  
萬葉集高市連黑人詠安禮乃崎、詠新  
井宿西起源太山、東對舞澤驛  
家、長一里、廣或十町、或二三町、有  
松、古驛路也、崎中央有莊堺

之碑石、色赤、(與力)碑石合村越崎南北相對、是昔二郡之堺乎、呼是碑石謂庄堺之石、碑文如有者無、

寶永四年關司政愈書曰、應永十二年、大波破此崎、或曰、文明七年八月

八明應八年六月十日甚雨大風、潮海與湖水之間驛路沒、日

簡崎千口水沒、在關東南十町許白洲濱住吉八王子之森間、尾崎孫兵衛者之祖、繫柑

樹杪存命矣、其孫今在橋本、永正七年八月廿七日、波濤中

斷於驛路、又破橋矣、從是以來、湖水變為潮海、橋本驛家

沒、置新井宿也、寶永四年十月四日地震、舉波三度、各高一

丈許、崩關潰家三百四十八戶、溺死二十一人、亡船四十八

艘、渡海絕、五日吉田城主牧野祭酒之臣富永政愈為關成、

當難所誌置也、寶永四年十二月筆記、(許)

今切海關與前驛中間、海路一里、政愈曰、渡海二十七町計、

三箇日、舊名英多、<sup>多加</sup>後云中之鄉、慶長以後號三箇日、

驛家、西至本坂岑一里十五町、東至引佐山一里餘、按續日本

後紀曰、雖 淳和天皇天長十年猪鼻驛廢更令興復云、後小

松天皇應永十二年、後土御門天皇文明七年、明應八年、後

柏原天皇永正七年等有急波、湖水變為潮海、蓋當此時猪鼻驛

水沒、古道廢、而新以英多鄉中三箇日為驛家乎、俗以新井宿

曰猪鼻者非也、

宇志、高三百七十三石三升三合、

舊地水沒、而百姓移居高平之處、猪鼻湖中礎石存、大崎、

大崎與館山相對之、海中一里、古老曰、昔細江之橋場也、本

坂道通猪鼻驛之橋場也、故濱名橋有二所、橋本與大崎也、

猪鼻、岩與下尾奈相對、セト追戶、渡凡三十步、自追戶北、猪鼻

湖也、東、號細江、

橋本鄉、村三、關ノ正西十五町、湖水與潮海之間有洲崎、昔ハ通舞澤ノ驛家、湖水入海所渡黒木橋故曰橋本、

敷智郡、○中略

所以號敷智者淵也、細江之水為淵、故號敷知乎、

昔廻澤與橋本之間、陸地驛路也、半途有莊堺、石、石與村

越、崎南北相對、是濱名與淵二郡之堺歟、堺內有村、號蛭

田、赤坂、柴江、舊荒井、應永十二年、明應八年、永正七年等

有大波、斷驛路、併鄉村水沒為海、故二郡之舊地大變矣、

(重編應仁記)

永正七年八月廿七日、同<sup>キ</sup>廿八日ニ遠州ノ海邊夥ク波打來

テ、數千ノ在家ヲ流シ捨テ、死亡スルモノ數ヲ不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>、陸地

三十餘町、悉<sup>シ</sup>海ト成テ、旅人俄ニ船ヲ設テ往行ス、其レヨリ

此所ヲ今切<sup>キ</sup>ノ渡リト名付ケリ、誠ニ亂世末代ト云ナガラ、

類稀ナル災變也、

(足利季世記)

震災豫防調査報告第四十六號

甲

永正七年八月廿七日、廿八日兩日ノ間ニ、遠江國エ大浪オビ  
タミシク來リ、陸地忽ニ海トナル、今ノ今切ノ渡ト申ハ是  
也、○續皇朝史  
略之三從フ、

〔高代寺日記〕

永正七年八月廿七日、遠州今切崩ル、

〔丙辰紀行〕

遠州荒井の濱より奥の山五里ばかり海となりて、大船も出  
入事、むかしは山につゞきたる陸地なりしが、中頃山よりほ  
らの貝おびたゞしくぬけ出で、海へ入ける、其跡かくの如く  
海となりて、今切と名づくるよし、古老いひ傳たり、

〔東海道名所圖會〕

今切

後土御門院御宇明應七年六月十日、大地震して、湖と潮との  
あいだきれて海とひとつに成て入海となる、これを今切と  
いふ、其後

後柏原院御宇永正七年八月廿七日、螺の貝出で山崩れ川埋  
もれ、舞坂の原を破り、深淵となる、又其後元祿年中、地震津  
濤ありて、海上あらく風強くして波高く、渡船の災となれ  
ば、寶永年中、官家より有司來り、今切の波頭に數萬の杭を  
打て、逆流をどめ、又舞坂の方より左へ海中半道の間、波

戸を築きて、渡船の風波を穩にし、ゆきくをどめず、自由  
ならしむ、

○今切ノ稱其起リ詳ナラズ、東海道名所圖會ハ明應中ニ、重編應仁記、足  
利季世記ハ並ニ永正中ト爲ス、紀行ノ諸書ヲ檢スルニ、亦明徴ナシ、蓋、今  
切ノ名ニ據テ之ヲ考レバ、明應七年荒井礮壞レ、今亦陸地没ス、因テ其舊  
ヲ對ヘテ今切ト云シニ似タリ、後考ヲ俟ツ、

〔續本朝通鑑〕

永正七年八月壬子、○廿八日、遠江山崩水涌螺貝出、螺貝抽起、波浪漲  
溢、陸地穿破而爲海、號今切渡、俗謂荒堰是也、  
荒或作新、

〔野史〕

永正七年六月二十八日、遠江山崩水涌螺貝出、濱名橋壞、陸  
地爲海、是曰今切渡、實錄、年代略記、或  
作八月二十七日、

○コノ二書及ビ東海道名所圖會、丙辰紀行、並ニ山崩レ螺出ル等ノ事ヲ載  
セタルモ、別ニ徴スベキ者ナシ、

同八年一月一日癸丑、京都地震フ、

〔實隆公記〕

永正八年十二月晦日壬子、晴、曉鐘後有地震、

二月二十一日壬寅、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

二月廿一日壬寅、今夜有地震、

四月十七日丁酉、京都地震フ、

〔實隆公記〕

四月十七日丁酉、天晴、午前梳髮、此間有地震、

七月四日壬子、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

七月四日壬子、夜有地震、

八月七日乙酉、上野國地強ク震フ、

〔新選和漢合圖〕

永正八年辛未八月七日、大地震、

○此地震、他書ニ見ル所ナシ、

十一月二日己酉、是夜、京都地震フ、

〔實隆公記〕

十一月二日己酉、天晴、亥下刻地震、自乾方有聲、

同九年二月八日甲申、京都地震フ、

〔續本朝通鑑〕

永正九年二月甲申、地大震十餘度、

○他書所見ナシ、何ニ據リタルヲ知ラズ、

六月九日辛亥、是夜、京都地強ク震ヒ、餘動アリ、

〔公卿補任〕

永正九年六月九日、地震、

〔實隆公記〕

永正九年六月九日辛亥、晴、入夜地震大動、頗久、

〔尙通公記〕

永正九年六月十日、壬子、昨夜地動七ケ度、今朝又一度、言語

道斷也、有宣卿勘文如此、

今日九日亥時大地震、月在豆宿、水神所動也、

天地瑞祥志云、月行豆宿者、水神所動也、

京房云、地動者邑有亂臣、天子慎之、又云、地動者□□□□

□□、大將軍慎之、又云、夏地動者天下病事、少老多死、內

經曰、六月地動者、七十五日內兵革起、民流亡、又云、水神

所動者、無雨、江河枯竭、

永正九年六月十日

從二位安陪朝臣有宣

今日九日亥時大地震、小動及度々、傍通、氏宿、火神之所動、

天文要錄云、夏地動、人生有喪、(主カ)內經云、六月地動、七十

五日內兵起、京房易妖占云、地動、教令從臣下出、必有流血

飢、天地瑞祥志云、氏宿動、天子凶、大臣受殃、又云、氏

動、山崩木落、惡風暴起、雹傷禾稼、又云、大動以大因、小動

以小因、穀梁傳云、地動、大臣盛、軍將動有變、

永正九年六月十日

左馬權頭在富

陰陽頭在重

〔拾芥記〕

永正九年六月九日、亥刻大地震、賀家火神動、安家水神動、七十五日內兵亂云云、條々凶也、

〔かな年代記〕

壬申九年六月、大地しん、○和漢合運、編年小史同シ、

〔塔寺八幡宮長帳續〕

永正九年六月六日、大地震、○正本長帳ニナシ、

〔請符集〕

豐受太神宮神主

依御教書注進、地妖並禁中恠異御慎御祈之事、

右得去月十八日御教書兩通、並今月二日祭主下知、同七日宮司告狀傳、地妖連續大矣、可爲御祈之由、次禁中恠異、御慎不輕、別抽精誠可令祈禱之旨、謹所請如件者、任被仰下旨、一七箇日、禰宜等一同、玉體安穩、天下泰平之由、奉致懇祈者也、仍言上如件、以解、

永正九年七月十三日

大内人正六位上度會神主久吉上

禰宜正五位下度會神主是久

禰宜從五位上度會神主朝保

禰宜從五位上度會神主朝久

禰宜從五位上度會神主常清

禰宜從五位上度會神主常榮

禰宜從五位上度會神主貞佳

禰宜從五位上度會神主朝繁

禰宜從五位上度會神主忠久

禰宜從五位上度會神主房久

〔續史愚抄〕

六月十八日庚申、地妖 搖歟、但地震 連綿、及宮中恠異等事、於神宮有御祈、他亦同○時元歟、記、

禰宜從五位上度會神主常誠

同月十日壬子、是夜、京都地震フ、

〔尙通公記〕

十一日、癸、晴、昨夜又有地動、

同月十三日乙卯、京都地震數、震フ、

〔尙通公記〕

十三日、卯、晴、午以後小雨濺、小雷鳴、今日亦地動及度々、

同月二十九日辛未、京都地震フ、

〔尙通公記〕

廿九日、辛、未、晴、昨曉○昨曉ハ去曉トイフガ未、今曉ノコトナリ、地動太、

同十年十二月八日壬寅、京都強震アリ、

〔續本朝通鑑〕

永正十年十二月乙未朔、壬寅、地大震、

○コノ地震、他書ニ見エズ、何ニ據レルヲ知ラズ、

同十一年四月二十四日丁巳、京都強震アリ、

〔年代記抄節〕

永正十一年四月廿四日、巳刻大地震、○異本年代記同シ、



八月二十五日乙卯、京都地震強シ、

〔公卿補任〕

永正十一年八月廿五日、地震、

〔年代記抄節〕

永正十一年八月廿五日、巳刻大地震、○異本年代記拔萃、後鑑所載永祿年代記同シ、

〔祇園社記〕

天變地妖御祈禱事、殊可被抽精誠候由、所被仰下也、仍執達如件、

永正十一年九月五日

對馬守判○英致

近江守判

祇園執行御房

同十三年三月二日癸未、京都強震アリ、

〔年代記抄節〕

永正十三年三月二日、卯刻大地震、

七月十二日壬辰、甲斐國地數、震フ、

〔妙法寺記〕

此年○永正十三年七月十二日、未刻震動致候、明ル十三日迄九度震

動ス、

同十四年五月十九日甲午、京都地震フ、

〔續本朝通鑑〕

永正十四年五月甲午、地大震、

○他書ニ所見ナシ、

六月二十日甲子、陸奥國會津、強震アリ、

〔會津土荳考〕

六月廿日、大震動、○八幡宮長帳續同シ、會津舊事雜考廿八日ニ作ルハ、非ナリ、

九月九日壬午、是夜、京都強震アリ、

〔年代記抄節〕

九月九日、夜半大地震、

同十六年三月十八日壬子、京都強震アリ、

〔尙通公記〕

永正十六年三月十八日、去夜大地震、

廿三日、地震勘文、今日進上之間、即記之、

今月十八日卯時大地震、月行豆宿、水神所動也、

天地瑞祥志云、月行豆宿、水神所動也、京房云、地動、邑有亂臣、天子慎之、又云、地動者大將軍慎之、又云、三月地動者、不過一旬兵革起、又云、春地動者、疾病有大喪、

永正十六年三月十八日

〔土御門〕  
從五位有春

〔異本年代記〕

永正十六年三月十八日、卯刻大地震、

同十七年三月七日乙未、京都地震フ、

〔尙通公記〕

永正十七年三月七日、乙未、風雨、酉刻地動、入夜雷鳴、

十月十一日己亥、京都強震アリ、

(一水記)

永正十七年十月十五日、寅刻地震大動也、十一日事也、

大永元年九月十一日庚申、是夜、奈良地強ク震

フ、

(興福寺略年代記)

大永元年九月十一日、戌刻大地震、

十月十九日戊戌、京都、奈良強震アリ、

(祐維記) 續南行雜  
錄所載

十月十九日、大地震有之、

廿三日

御教書折紙、薄黒染也、

地震御祈事、從來廿七日、一七ヶ日殊可抽精誠之由、可

令下知春日社給之由、被仰下候也、仍執達如件

十月廿三日

右少辨尹豊奉

同四年九月二十六日戊子、京都地震フ、

(實隆公記)

大永四年九月廿六日戊子、晴、午後地震、

同五年五月二日庚申、是夜、京都地震フ、

(實隆公記)

大永五年五月二日庚申、晴、亥下刻地震、

八月二十三日庚戌、相摸國地震強ク、鎌倉由比濱

ノ江、河、埋没シテ平地ト成レリ、

(塔寺八幡宮長帳續)

大永五年八月廿三日、日本大地震、別シテ鎌倉大地震、由井

濱ノ川入江沼、皆震埋テ平地ト成、廿七日迄晝夜ノ地震也、

同六年十月十二日壬戌、京都地數、震フ、

(實隆公記)

大永六年十月十二日壬戌、晴、寒氣甚、午刻地震、及晚又震、

入夜又震、

(尙通公記)

大永六年十月十二日、壬戌、午刻大地震、入夜兩度又動也、

十一月十八日、丁酉、多武峯寺御返事占形等下之、去月地震

勘文進上之、如此、

今月十二日午時地震有音、傍通鼻宿、水  
神所動也、

天地瑞祥志云、水神所動者、無雨、江河枯竭、年不宜麥、內

經曰、十月地動者、五十五日有兵、災異占云、地震疾疫起、

京房曰、地震人民流亡、女宮有憂、天鏡經云、地震天子慎之、

大永六年十月十五日

陰陽頭有春

〔二水記〕

大永六年十月十二日、午刻地震、入夜及度々、

十五日、傳聞今度地震連日及度々、古文之趣、功臣失時、主上御慎、宮室火事、五十日之内大兵亂云々、恐怖何事如之哉、

同月十四日甲子、京都地二回震フ、

〔尙通公記〕

十四日、甲子晴、兩度地震、

同七年二月十三日辛酉、京都地震フ、

〔二水記〕

大永七年二月十三日、未刻地震、

〔公賴公記〕

大永七年二月十三日、辛酉晴、朝合戰粟屋衆也、數多ウタル、

也、其後合戰、道永可ウタル、(同カ)武家御所○足利已對兵具御動

座、其時分大地震也、奇特事也、

享祿二年十一月八日庚子、是夜、攝津國地震フ、

〔高代寺日記〕

享祿二年十一月八日、地震、子日也、

同四年閏五月二十五日戊寅、京都地震フ、

〔實隆公記〕

享祿四年閏五月廿五日戊寅、陰、地震、

〔二水記〕

享祿四年閏五月廿五日、午時地震、古文云、臣下侵上、將軍有變、老若病死、百姓不安、火事等、悉以凶事也、可慎々々、火神動、

天文元年一月二十日己巳、讚岐國地強ク震ヒ、餘

動是月二十七日ニ及ベリ、

〔讚岐國大日記〕

天文元年正月自二十日至二十七日、大地震、

同二年一月十六日己未、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

天文二年正月十六日、卯一點地動、

二月二十二日乙未、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

二月廿二日乙未、天晴、七時分地動云々、

九月二十七日丁卯、京都地震稍、強シ、

天文二年、三年、六年、七年、十一年、十三年、十四年

〔言繼卿記〕

九月廿七日丁卯、天晴、土用、今曉寅時地動、大、

同三年九月十二日丙子、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

天文三年<sup>甲午</sup>九月十二日、地震、

十月七日庚子、八代地震フ、

〔八代日記〕

十月七日、地震、

同六年十二月六日辛亥、三河國地震フ、

〔東榮鑑〕

天文六年十二月六日、午刻地震、

同七年六月十七日己未、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

天文七年<sup>戊戌</sup>六月十七日、<sup>己未</sup>地震、

十月二日壬寅、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

十月二日、卯乃時地震、

同月十六日丙辰、八代地震フ、

〔八代日記〕

十六日、地震寅時、

同十一年二月二十八日己卯、京都及比近江國坂本、地震フ

〔惟房公記〕

天文十一年三月三日、<sup>甲申</sup>、去月廿八日、午刻亥刻地震云々、

坂本殊更鳴動云々、○言繼卿記、公儀日記、蜷川日記、並ニ所見ナシ、

閏三月五日乙卯、肥後國阿蘇山、鳴動シテ火石ヲ

雨ラス、

〔八代日記〕

天文十一年<sup>壬寅</sup>閏三月五日、阿蘇山御めいどう、火石卯時、又

午時、

同十三年四月二十二日庚寅、薩摩國地震強シ、肥

後國亦震ヘリ

〔薩藩舊記〕

年代記

甲辰天文十三年四月廿二日、大地震、

〔八代日記〕

天文十三年<sup>甲辰</sup>四月廿二日、地震ノ之時、

同十四年三月、薩摩國強震アリ、

〔薩藩舊記〕

年代記

天文十四年三月、大地震、時之内三度、○日ハ詳ナラズ、

同十五年七月十三日戊辰、肥後國八代、地三回震

フ、明日又震フ、

〔八代日記〕

天文十五年丙午七月十三日、地震三度、明日寅時、以上四度也、

同十六年二月十日壬辰、八代地震フ、明日又震フ、

〔八代日記〕

天文十六年丁未二月十日、地震、十一日、地震、

同十八年一月三十日辛丑、京都地震稍強シ、

〔續史愚抄〕

天文十八年正月三十日辛丑、地露、大動、公條公記、

四月十四日甲寅、甲斐國地強ク震ヒ、餘動三十日

間ニ及ベリ、

〔妙法寺記〕

天文十八年己酉卯月十四日、夜中頃ナキユリ申候事無限、言語

同斷不及申候、五十二年サキノナキ程ト申傳ヘ候、餘リ不思

義サニ書付申候、以上三十日許ユリトホシニユリ申候、

同十九年六月二十二日甲申、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

天文十九年六月廿二日甲申、天晴、丑下刻地震暫、

同二十年五月二十四日辛亥、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

天文廿年辛亥五月廿四日、地しんさるのとき、

同二十二年八月二十四日戊戌、鎌倉地強ク震フ、

〔續本朝通鑑〕

天文二十二年八月戊戌、鎌倉風雨地震、鶴岡宮及堂社破壊、

同月二十八日壬寅、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

天文廿二年癸丑八月廿八日、地しん卯のとき、

同二十三年十一月七日甲辰、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

天文二十三年十一月七日甲辰、陰、曉丑刻地震、

弘治元年八月十九日辛巳、陸奥國會津地強ク震

ヒ、瀧谷村堂岩崩レ、堂舎ヲ埋メタリ、

〔會津八幡宮年日記〕

弘治元年八月十九日、大風雨、大地震、日本山崩會津瀧谷邑堂

天文十四年、十五年、十六年、十八年、十九年、二十年、二十二年、二十三年

弘治元年

震災豫防調査報告第四十六號

甲

岩三分二崩テ、聖徳太子ノ堂、別當松原坊ノ庵民家共ニ不殘打潰ス、唯松原坊ノ子一人生殘、氏神第六天神ノ祠許殘ル、

同二年二月十三日癸卯、京都地震強シ、

〔公卿補任〕

弘治二年二月十三日、大地震、

〔言繼卿記〕

弘治二年二月十三日癸卯、天晴、申刻大地震、

同三年六月二十日壬寅、京部地強ク震ヒ、續震數

回ニ及ベリ、

〔御湯殿上日記〕

弘治三年六月廿日、ことのほかなるぢしんにて、日のうちに六ごまでゆりて、ことごとくしき御事なり、あきとみさいもん

しん上申、

〔公卿補任〕

弘治三年七月〇六月誤廿日、大地震、

〔續史愚抄〕

弘治三年六月廿日壬寅、地震大動、東執記

〔長享年後畿内兵亂記〕

弘治三年八月、〇六月ノ誤ナリ、大地震、

同月二十二日甲辰、京部地震フ、

〔續史愚抄〕

廿二日甲辰、地震、東執記

〇秘閣本東寺執行日記ハ、偶々コノ年ノトコロ闕ケタリ、

永祿元年三月廿九日丁丑、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

(永カ)元祿元年戊午三月廿九日、卯刻ニ地震、

五月二十九日丙子、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

永祿元年五月廿九日、雨晴陰、未刻地震、

同二年四月二十八日己巳、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

永祿二年己未四月廿八日、地震卯刻、

同四年三月十一日辛未、八代地震フ、

〔八代日記〕

永祿四年辛酉三月十一日、辛未卯時地震

十月十七日癸酉、八代地震フ、

〔八代日記〕

十月十七日、癸酉地震卯ノ時、

十一月二十八日甲寅、八代地震フ、

〔八代日記〕

十一月廿八日、甲寅ちしん卯ノトキ、

同五年三月九日癸巳、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

永祿五年三月九日、雨ふる、ちしん四時にゆる、

六月十五日戊辰、肥後國八代庄、海嘯陵ニ襄レ

リ、

〔八代日記〕

永祿五年壬戌六月十五日、八代庄内高鹽三ツ、

同六年一月二十六日、常陸國及ビ陸奥國會津、強

震アリ、

〔増修和漢合運〕

○本書ハ常陸和光院ノ僧ノ撰ビシモノナリ、

永祿六正廿六、申刻大地震、

〔八幡宮略記長帳〕

永祿六年癸亥正月廿六日、大地震、

四月一日己酉、肥後國阿蘇山鳴動セリ、

〔八代日記〕

永祿六年癸亥四月一日、己酉阿蘇山御鳴動之由申候、

五月十六日、永正二乙丑年、あそ御鳴動之時、阿そ御詠歌、其年

諸人うけ候を、今年又諸人うけ候、

ちはやふる神のちかひのふかければ、爐を神のすがたな  
りける、

いつまでもかはらぬ物は我すがた、あゆみをはこべ四方  
の人々、

同月二十八日丙子、肥後國八代、地震フ、

〔八代日記〕

四月廿八日、丙子地ちしんねの刻、

六月十七日甲子、八代地強ク震フ、續デ又震フ、

〔八代日記〕

六月十七日、甲子大地しん、未刻、又同時小地しん、

七月十九日己未、八代地震フ、

〔八代日記〕

七月十九日、己未地ちしんみの刻、

八月二十五日辛未、京部地震フ、

〔御湯上日記〕

永祿六年八月廿五日、ひるのすぎにちしんゆる、

十二月二日丁未、常陸國及ビ陸奥國會津、強震アリ、

〔増修和漢合運〕

永祿六年極月二、子刻大地震、

〔八幡宮略記長帳〕

永祿六年十二月二日、大地震、

同月二十一日丙寅、八代地震フ、

〔八代日記〕

十二月廿一日、丙辰刻地刻、

同七年三月七日己酉、京都地強ク震フ、

〔言繼卿記〕

永祿七年三月七日己酉、天晴、辰下刻大地震、鬼宿、金翅鳥動也、

四月三日乙亥、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

四月三日乙亥、自午時雨降、寅刻地動、金翅鳥動也、

同八年七月十九日癸丑、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

永祿八年七月十九日、ちしんゆる、

同九年一月二十三日丙辰、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

永祿九年正月廿三日、よるの七時ほどにちしんゆる、

〔言繼卿記〕

永祿九年正月廿三日、去夜子刻地動、

同十年十一月九日庚申、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

永祿十年十一月九日庚申、天晴、巳刻地震、

同十一年五月八日丁巳、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

永祿十一年五月七日、ちしん、こよひのあか月七時にゆる、

同月二十五日甲戌、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

永祿十一年五月廿五日甲戌、天晴、子刻地震、

九月七日癸丑、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

九月七日、(初夜)しよやのすぎにちしんそとゆる、

十月十五日辛卯、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

十月十五日、ちしんひるほどにゆる、



同月二十八日甲辰、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

廿八日、ひるのまへにちしんゆ

同十二年九月二十三日甲午、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

永祿十二年十一月四日、九月廿三日(術カ)地ちん御つゝしみの

よし申ての御いのりあり、さんじやうからもたびく御い

のり候よし申て、色々の御いのりあり、

元龜元年二月十一日己酉、京都地震フ、是日、近

江國モ震ヒ、明日又震フ、

〔御湯殿上日記〕

永祿十二年(雷)〇元龜 二月十一日、ちしんゆる、かみもちとなる、

雨ゆきあられふる、

〔言繼卿記〕

永祿十二年言〇元龜 二月十一日己酉、天晴、時正入、午刻地震、〇

繼、是日近

江ニ在リ、 十二日庚戌、天晴、時正辰刻地震、但午兩日、京都不動云々、

三月八日丙子、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

三月七日、〇八日誤カむまのこくにちしん地よりなりてゆる、

十日、八日の日のちしんのせんもん占文、ありなかしん上申、り龍

うしん神動ごうにて、こののほかの御つゝしみのよし申候、

あす日よく候とて、ありなかしんの御いのり御なでもの

申しだされ候、

〔言繼卿記〕

三月八日丙子、天晴、巳午刻地震、

五月九日丙子、京都地強ク震フ、

〔言繼卿記〕

五月九日丙子、雨降、自己刻晴、但時々小雨、午刻大地震、天

王動也、

同三年閏一月二十日丁未、奈良地強ク震フ、

〔多聞院日記略〕

元龜三年閏正月廿二日、廿日ノ曉大地震了、

同月二十八日乙卯、京都地震フ、

〔續史愚抄〕

元龜三年閏正月廿八日乙卯、地動、御湯殿記、〇歴朝要紀同ジ、

〔資定卿記〕

就天變地妖御祈事、別而可抽精誠旨、可令下知松尾稻荷廣田等社給之由、

天氣所候也、仍執達如件、

震災豫防調查報告第四十六號

甲

五〇二月八日

謹上 伯殿

就天變地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、  
天氣所候也、以此旨可令申入仁和寺宮給、仍執啓如件、

二月八日

謹上大納言僧都御房

就天變地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、  
天氣所候也、以此旨可令申入青蓮院宮給、仍執啓如件、

二月八日

謹上左大臣法印御房

就天變地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、  
天氣所候也、以此旨可令申入妙法院宮給、仍執啓如件、

二月八日

謹上大納言法印御房

就天氣地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、被仰下候、此旨可令申入(府王宮)  
萬珠院宮給、仍執啓如件、

二月八日

謹上大納言僧都御房

就天變地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、被仰下候也、仍執達如件、

二月八日

謹上大納言僧都御房

就天變地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、  
天氣所候也、此旨可得御意候、恐々謹言、

二月八日

左少辨

謹上中納言律師御房

就天變地妖御祈事、別而可被抽丹誠之由、  
天氣所候也、此旨可得御意候、恐々謹言、

二月八日

謹上大納言僧都御房

就天變地妖御祈事、別而可被抽精誠旨、  
天氣所候也、仍執啓如件、

二月八日

謹上吉田侍從殿

就天變地妖御祈、撰良辰七箇日可勤仕由於諸社  
神宮、賀茂、  
稻荷、廣田、寺、青蓮院、仁和寺、妙法院、曼珠院、  
吉田、已上六社也、天台座主云、聖護院、三寶院、大覺寺。

二月八日

謹上吉田侍從殿

五月十三日戊戌、京都地震フ、

〔續史愚抄〕

五月十三日戊戌、地震、御湯殿記、

〔歷朝要紀〕

元龜三年五月十三日戊戌、地震、御湯殿記、

六月一日乙卯、京都、奈良、地強ク震ヒ、續震アリ、

〔東寺執行日記〕

元龜三年六月朔日、大地震辰刻ニ三度、

〔多聞院日記略〕

六月朔日、巳刻ニ終ニ大地震兩度在之、

〔年代記抄節〕

元龜三年六月一日、地震、

〔歷朝要紀〕

六月乙卯朔、地震二次、御湯殿記、

十一月十八日庚子、京都地震フ、

〔歷朝要記〕

十一月十八日庚子、戌時地震、御湯殿記、

天正三年六月五日壬申、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

天正三年六月五日、おしんそとゆる、

同六年十月二十九日丁未、三河國地震強シ、

〔石川忠總留書〕

天正六年十月廿九日、申刻大地震、

同七年十一月二十一日壬戌、奈良地強ク震フ、

〔多聞院日記略〕

天正七年十一月廿二日、昨日廿一日辰午刻大地震了、兵亂云云、

同十年八月二十日乙巳、奈良地強ク震フ、

〔多聞院日記略〕

天正十年八月廿一日、昨夕戌刻ノ終ニ大地震了、如何、

同月二十三日丁卯、京都地震フ、

〔蓮成院記錄〕

一天正十年九月廿二日、自京都宣下到來之由ニテ、自御寺家

當別會所へ申來了、ウズズミ一枚ニ、

去月廿三日地震事、御慎不輕、一七ケ日抽丹誠可奉祈朝

廷安全、四海安泰之旨、寺一同可令下知給由、天氣所候

也、仍執達如件、

九月十二日

左少辨宣光

謹上 興福寺別當僧正御房

一 去月地震儀付、被成下御綸旨、御祈禱之事、自來晦日法藏

會執行之間、其以後吉日勘進次第、可有其沙汰旨決則畢、

則六方へモ書狀以被申送了、幸徳井邊へモ勘進事被申遣

了、

〔多聞院日記略〕

十月廿一日、先段地震祈禱之事、從叡慮被仰付候間、今日ヨ

リ村東寶羣參、仁王經轉讀五部ツ、在之、

同十一年一月十八日壬申、是夜、奈良地強ク震フ、

〔多聞院日記略〕

天正十一年正月十九日、昨夜子刻歟大地震了、戌亥ヨリ至辰

已火神動、火才災旱魃、沈思々々、

三月三日乙酉、三河國地三回震フ、

〔家忠日記〕

天正十一年三月三日乙酉、地震二度する、

同月四日丙戌、是夜、三河國地二回震フ、

〔家忠日記〕

四日丙戌、夜地震二度、

六月二十六日丙子、三河國地震フ、

〔家忠日記〕

六月廿六日丙子、巳刻ニ地震候、

同十三年七月五日甲戌、三河國地強ク震フ、

〔家忠日記〕

天正十三年七月五日甲戌、永良へ堤つかせて夜迄少々、午時  
大なへゆり候、百年已來のなへ之由申候、

〔石川忠總留書〕

天正十三年七月五日、大地震、

〔年代記抄節〕

天正十三年七月五日、地震、

十一月二十九日乙丑、山城、大和、攝津、近江、美濃、

尾張、伊勢、三河等ノ諸國、地大ニ震ヒ、瀕海ノ地  
ハ海嘯暴溢シ、人畜死傷夥シ、餘震年ヲ越エテ止  
マズ、

〔梵舜日記〕

天正十三年十一月廿九日、夜半時分ニ、大地震良久シ、明日  
マデ如此也、近國之浦濱之屋、皆波ニ溢レテ、數多人死也、其  
後日々ニ動コト、十二日間也、

同晦日、同大地震、當東ニ如雷鳴響也、是夜半時分也、

同十二月一日、大地震、

同二日、同大地震、

同三日、同地震、

同四日、同地震、

同五日、同地震、

同六日、同地震、

同七日、同地震、

同八日、同地震、

同九日、同地震、

同十日、同地震、

同十一日、本所於禁中神道之大護摩執行也、二夜三日、御祈  
禱之施物三十六石渡也、

〔東寺執行日記〕

天正十三年十一月廿九日、大地震、夜々中前ニテ可有之、講堂棟十間ハカリモ可有歟ユリ瓦崩、大日不動般若菩薩頭口ヲチカ、リ、御手落、言語道斷無申斗、其外千手堂柱以下、北へ五分ソリユガム、又灌頂院悉破損シテ、壁已下クヅレ、其外坊々築地クヅレ、驚目ナリ、四脚石スへ皆ユガムト見タリ、同二十日ニモ事外大地震、夫ヨリ打續十二月中、翌年天正十四二月中、細々地震ユリ、或ユラス日モアリ、何も前々ケ様之儀無之、

〔多聞院日記略〕

天正十三年十二月八日、今朝モ地震了、今日迄十日也、漸々ニヨワシ、

九日、又少震了、

十日、今日モ少地震了、今度地震ハカドモクヅル、

十一日、先段地震ノ時、當山ヨリ火多ク出了ト、内裏ノ御庭ニハ數千ノ聲ニテ夜躍了、朝見レハ異類ノ足アト、或九或四方長ク大小、牛馬以下様々ノアト也シ、

院御所ニハ首多アリシ、數ヲヨムニ消失了、二百斗在之歟ト云々、方々不思議共在之云々、

十二日、又少震了、

十三日、又今朝震了、市兵、大坂へ秀吉秀長一所之間、爲見廻越了、

十四日、曉又震了、

十六日、今日モ地震了、

十七日、又地震了、

十九日、地震モ今日ハ不動、昨日迄十九日之間、震動了、

廿二日、先夜又地震了ト申、

十四年正月八日、又地震、十一月廿九日ヨリ、至今日不止、如何、申終刻又地震了、

舊冬十一月二十九日至今日、淺深多少ハアレ共、終ユリヤム

事無之、永正七年庚子八月八日、刃刻大地震、所々破損、天王

寺石ノ鳥居崩、藤井寺モクヅル、同數日ユリテ、九月廿九日

五夜(後)ノ半ヨリ東風大雨、奈良中方々大破ニ合ト、舊記ニ在

之、心細キ者也、

十五年三月十三日、朝ノ間大雹、木連子ホドナ、ル降下、消肝、昨朝ハ如雪ナル

大霜下、去々年ノ十一月廿九日ヨリ昨今迄、淺深輕重大小

コソアレ、地震毎日毎夜也、去月ハ晝夜度々、當山ヨリ西へ

幡雲立了、當月七日ニハ四打ノ時分ニ、日輪五出了、各慥ニ

見之、黒日赤日色々也シト云々、七難ノ最頂、抑天地ノ物怪

非只事、一天ノ動亂眼前也、如何ナル事アラン哉、物ヲ待様

也、沈思々々、

天正十三年

四月廿七日、昨日モ地震了、去々年十一月廿九日ヨリ多少コソアレ、毎日子今地震在之、

〔石川忠總留書〕

天正十三年十一月廿九日、雪降、大地震、

同十三年酉の霜月下旬、石川伯耆守立退岡崎、その後二三日

過て大地震、霜月二十九日とも有之よし申候、

〔具塚天滿移位記〕歴代殘闕  
日記所載、

去年之大地震ヨリ、おり／＼不止、大晦日之時分まで節々ゆ

りたる也、當春正月十二日にもゆりたる也、御堂御通夜聽聞

之間ニモゆりたる也、

二月廿日、朝六時分地震、舊冬ヨリ于今不止、

〔御湯殿上日記〕

天正十四年正月四日、はるゝぢしんこのあかつき二度ゆる、

八日、はるゝぢしんゆる、

十七日、はるゝぢしん二どゆる、

二月十日、はるゝ、こよひのあかつきよあけがたにぢしん二ど

ゆる、

廿日、はるゝ、このあかつきぢしんゆる、

廿五日、あかつきかみなる、ぢしんゆる、

廿八日、はるゝ、けさ又ぢしんゆる、

三月十四日、はるゝ、ぢしん二どまでゆる、

十七日、雨ふる、こよひよなかのぢぶんに、ぢしんゆる、

廿七日、はるゝ、けさぢしん、

〔家忠日記〕

天正十四年丙戌正月一日丁酉、なへゆる、夜雨降、

二日戊戌、なへ、雨降、

三日己亥、同、

四日庚子、同、

五日辛丑、同、

六日壬子、同、

七日癸卯、同、

八日甲辰、同、

九日乙巳、なへ、

十日丙午、同、雨降、

十一日丁未、同、

十二日戊申、同、

十三日己酉、同、

十四日庚戌、同、

十五日辛亥、同、

十六日壬子、同、

十七日癸丑、同、  
 十八日甲寅、同、  
 十九日乙卯、同、四ツ時分迄雨降、  
 廿一日丁巳、同、  
 廿二日戊午、同、  
 廿三日己未、同、  
 廿四日庚申、同、雨降、  
 廿五日辛酉、同、大雨降水出候、  
 廿六日壬戌、同、  
 廿七日癸亥、同、  
 廿八日甲子、同、  
 廿九日乙丑、同、  
 二月大一日丙寅、なへ、  
 二日丁卯、同、  
 三日戊辰、同、雨降、  
 四日己巳、同、あさ迄雨降、  
 五日庚午、同、  
 六日辛未、同、  
 七日壬申、同、  
 八日癸酉、同、

十一日丙子、同、雨降、  
 十二日丁丑、同、

〔公卿補任〕

天正十三年十一月十日○廿九日、大地震、

〔年代記抄節〕

天正十三年十一月廿九日、夜亥時ヨリ子ノ時マデ大地震、光物飛渡、其後日夜動事不止、

〔かな年代記〕

天正十三年十一月廿九日、大地しん、としこへてもやまず、

〔續史愚抄〕

天正十三年十一月廿九日乙丑、大地震、東寺金堂棟十間許

崩、佛像多摧、灌頂院大壞、築地門等礎傾言、或作十九日及廿一日、

東執記、公卿補任、十九家記

追、言田注、廿一日、年代略記、十月廿九日、俱謬矣、  
 三十日丙寅、地又大動、此後毎日地震、主翌年二月休、東執記、

〔豐鑑〕○群書類

天正十二年霜月廿九日子の刻斗にや、おびたどしくないふりけり、その様いはん限りなし、いにしへもたびく大ないふりけると記しをけれども、眼あたりかゝることなんめづらかなる、伊勢、尾張、美濃、近江、北陸道分てありけりとなん、浦里などはさながら海へゆり入、犬雞などの類まで路な

天正十三年、十四年、十五年、十六年、十七年

くなりし所々ありとなん、家などひしけし内にありながら、  
さすが死もやらざりしに、火もへつきて焼死、さげぶこゑ哀  
など、思ひやるさへたへがたくなん、此わざわひにあひて、  
國々里々、命を失ふ者、際限なかるべし、常のないなどの布  
る事、明る春二月まで、そのなごりたへざりけり、おそれの  
中に恐るべきは地震なりけりと云しも、げにとおほへし、む  
かしの筆にゆずりて、くたくしければもらしつ、

〔讚岐國大日記〕

天正十二年十一月廿九日、大地震、越年不止矣、

〔續史愚抄〕

天正十二年十一月廿九日、此日地震大動踰年不止云、享年記、

○豐鑑、大日記、愚抄ノ三書、前年ニ掲ゲシハ誤レリ、

同十四年四月九日甲戌、京都地震フ、

〔御湯殿上日記〕

天正十四年四月九日、はる、このあか月ちしんゆる、

同十五年二月二十二日辛巳、京都地震フ、

〔言經卿記〕

天正十五年二月廿二日辛巳、天明時正、卯時地震、

七月二日己丑、是夜、三河國地二次震フ、

〔家忠日記〕

天正十五年七月二日己丑、夜地震二度、

同月十九日丙午、三河國又震フ、

〔家忠日記〕

十九日丙午、地震候、

同十六年九月十日庚申、京都地震フ、

〔言繼卿記〕

天正十六年九月十日庚申、亥刻地震、大雨、

同十七年二月五日癸未、駿河、遠江、三河、地大ニ

震ヒ、駿、遠二國ノ人家多ク潰レタリ、

〔増補家忠日記〕

天正十七年二月五日、大地震、駿遠兩國の民屋多破れ倒る、

〔石川忠總留書〕

天正十七年二月五日、雨、大地震、

三月三日庚戌、奈良地數、震フ、

〔多聞院日記略〕

天正十七年三月三日、過夜南辰已如電光一夜光リ了、此間日

夜地震、心細者也、

三月十八日

一當月三日、月蝕ス、日光ヨリ及晚イ曉又光物多ク出タルヲ各見



之云々、此間毎夜南辰已光ル、電光ノ様ニハ無之、空惣ヒ  
カリニ光、地震ハ日夜度々也、天地ノ災起如何、心細キ者  
也、

同十八年十月二日辛未、武藏國江戸、地震フ、

〔家忠日記〕

天正十八年十月二日辛未、雨降、巳刻ニ地震候、

同月十六日乙酉、江戸地震フ、

〔家忠日記〕

十六日乙酉、雨降、酉刻地震、

十一月二十二日庚申、江戸地震フ、

〔家忠日記〕

十一月廿二日庚申、辰刻ニ地震候、

文祿元年九月三日庚申、江戸地強ク震フ、

〔増補家忠日記〕

文祿元年九月三日、大地震、

同二年四月十四日戊戌、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

文祿二年四月十四日、天晴、雞鳴、丑刻ニ地振動、

九月二十五日丙子、京都地震フ、

〔時慶卿記〕

九月廿五日、天晴、夜半地振動甚、

同四年一月四日丁丑、京都地震稍、強シ、

〔續史愚抄〕

文祿四年正月四日丁丑、地大動、或記、

大日本地震史料 卷之四 終